2020年3月3日（火）
岩手日報　4面

あの日の決断

岩手の経営者たち

アルプス閉鎖機に独立　1年後、3人で新会社

イーアールアイ　▽②△

水野節郎さん

盛岡市上堂の組み込み機器開発・製造のイーアールアイ社長、水野節郎さん(64)は住田町の農家に生まれた。13人きょうだいの末っ子で、一番上の姉とは親ほどの26歳も違った。手先が器用で絵を描くのが好きだった。高校は陸上部の長距離キャプテンで3年生の冬まで走っていた。

きょうだいは大勢いたから、当然、家を出て自立することを求められた。工業系を学ぼうと、東北工大(仙台市)の電子工学科に進学。4年生で入った研究室で、初めてマイクロコンピューターと出合った。

「コンピューターが小型化、高機能化する時代の変わり目だった。モノを新しく作る面白さがあった」。12ビットマイコンを使ったシステム製作が研究テーマだった。朝から夜まで打ち込み、自分の針路が見えた気がした。

卒業後、都内と横浜の会社で合わせて12年余、ソフトウエア、ハードウエアの技術者として働いた。マイコンの開発一筋で、家電やゲーム、車両メーターなど幅広い機器と関わった。

横浜の会社員時代に、学生の頃から交際していた盛岡市出身の裕子さん(62)と結婚した。34歳の時、裕子さんが両親の世話でUターンを望んだのをきっかけに岩手に戻った。

自身3カ所目の就職先は玉山村芋田（現盛岡市芋田）に盛岡工場があった大手電子機器メーカーのアルプス電気（現アルプスアルパイン）だった。

県内有数の誘致企業は、ワープロ用プリンターの製造拠点だった。自身はオフィスコンピューター開発やレシート用プリンター部門で、主任技師などとして現場をまとめた。Uターンしたはずが単身で横浜、東京本社の勤務も経験した。

2000年代初め。パソコンが普及する中、ワープロ向けの事業は急速に縮小。安価な海外製品との競争も業績悪化を招いていた。02年1月、会社は経営合理化のため、従業員約570人の盛岡工場の閉鎖を決めた。

突然の発表。それでも、どこか落ち着いていた。「統廃合は覚悟していた。会社の方針ならば仕方がないかなと…」

アルプスに残るか、辞めるか―。悩んだが、単身赴任はもうしたくなかった。起業を選択肢として、強く意識するようになった。

その後1年近く、市内のソフトウエア会社に身を置き03年5月、共にアルプス電気で働いていた3人でイーアールアイを設立。48歳の脱サラだった。

「好きなことをすれば、なんとか食えると思った。リスクは考えず、ワクワク感の方が大きかった」。アルプスで築いた豊富な人脈と、頼れる技術者の存在が自信の裏付けにあった。

「創業から5年で売上高5億円、人員体制50人」を目標にした。現実は甘くなかった。

アルプス電気盛岡工場閉鎖

「5月めど」の方針

従業員は配置転換

アルプス電気盛岡工場の閉鎖方針を伝える2002年1月8日付の本紙。水野節郎さんはこれを機に退社し、翌年5月にイーアールアイを立ち上げた

この記事は岩手日報社の許諾を得て転載しています